

# じかたび

1500号さらに輝け



全日自労建設一般労働組合

戦前からの伝統を持ち、東京土建、全日土建、全日自労、建設一般全日自労と長い歴史を受けついで、「じかたび」が一五〇〇号をむかえました。

ふりかえれば、ガリ切り二面の機関紙から活版刷りへ、また占領軍による弾圧で発刊停止になり、一年後の再刊から今日まで、地下たびでしっかり大地をふみしめ、土のぬくもりを足のうらに感じるように、社会の底辺に根づいて成長してきました。

また力づくでたたかった時代から、世論の支持を受けてきた

かう時代に大きく変化し、「じかたび」もその変化に対応しながら、活動家の機関紙から、職場全員の機関紙へ、さらに地



域のみなさんにも読まれ、親しまれる機関紙へと装いをかえてきました。

組合では、「一五〇〇号」を記

## 発刊にあたって

教宣部長 栗山嘉明

念して、「機関紙中心の組合活動」の内容や、たたかひの武器として、師として、友として創意工夫してきた「じかたび」の特徴を一冊のパンフ「じかたび」にまとめました。

このパンフ「じかたび」によって、ながい間「じかたび」とともにたたかってきたなかまは、運動をふりかえって、その成果に確信を持ち、新しく組合にはいつたなかまは教科書として、「機関紙中心

の組合活動」の伝統と方針を学び、組合員以外のみなさんには、建設一般全日自

労がつくりあげてきた機関紙活動を理解していただき、それぞれの組合の機関紙活動の参考にしていただければ幸いです。

今日もまた、配布の協力をしていただいている呑み屋の店先に吊りさげられて読者の帰宅を待ちわび、あるいは配達活動を生きがいとしている老組合員夫婦の腕に抱かれて読者に届けられる「じかたび」に想いをはせながら「一五〇〇号」を祝いたいと思います。

### 目次

発刊にあたって……………	1
目で見ると「じかたび」一五〇〇号のあゆみ……………	2
発言でつづる「じかたび」の教訓……………	10
機関紙中心の組合活動……………	16
読みあい話しあい	
個人有料購読制	
独立採算制	
配達・集金活動	
拡大運動	
通信員制度	
組合員の心が通う新聞を	
闘いと「じかたび」	
地方機関紙・職場新聞	
「じかたび」君ありがとう 中西五洲……………	25
座談会 開くのが怖くなるような	
新聞を……………	26
なかまの文芸……………	30
読者の投稿……………	32
マンガ……………	34
年表 「じかたび」のあゆみ……………	35

昭和  
20年代

# 目で見る じかたび1500号のあゆみ (昭和22年～59年)

- ① 創刊号(「地下タビ」)  
東京土木建築労組の  
機関紙として発刊  
(1947年1月15日付)
- ② 米占領軍により4  
万部が押収され、発  
行停止となる(1950年  
9月13日付)
- ③ 復刊第1号(「ぢ  
かたび」)現在の号  
数はここから(1951年  
12月10日付)





⑧ “自労婦人しんぶん”  
(1959年3月20日付57号)

⑨⑩ 「機関紙中心の組合活動」の方針を出す(1961年7月10日付299号、同年2月18日付278号)



⑦ 夫対打切り攻撃は  
じまる(1962年11  
月5日付366号)



④⑤ 「戦争と失業に反対する国民大行進」1月6日福岡、2月5日福島出発、3月4日東京着(1959年1月11日付198号)(1959年2月21日付201号)

⑥ がっちりスクラムを組む炭労(タロウ)、自労(ジロウ)の共同闘争(1962年10月29日付365号)





昭和

40年代



⑪ 第2次失対打切り  
反対闘争（1968年  
6月30日 労働省）

⑪

⑫ 読みやすさを工夫—ルビをふる（1969年6月9日付716号）

⑬ 日本ジャーナリスト会議からJCJ賞を受賞、機関紙でははじめて（1969年8月25日付727号）



⑱ “じかたび”1000号をむかえる  
(1974年10月28日付)



⑱

⑰ 低所得者の生活危機突破の闘  
争(1973年6月4日付920号)



⑰



⑰ 建設労働者の中に全日  
自労を一建設・民間版を  
発行(1971年12月9日号外)

⑰



⑱

⑱ 大量宣伝—10万  
枚も1日で(1970年  
11月16日付794号)

⑲ 一般紙に意見広  
告も(1971年3月8  
日809号)

⑲



昭和

50年代

- ①⑨ 失対事業の再確立方針でー第38回定期大会 (1977年9月12日付1147号)

①⑨



- ②① 大臣、政党党首、報道関係、学者、労働界など20数回の対談シリーズがはじまる (1978年5月8日付1180号)

②①

②①

②①

全日自労建設一般労働組合を結成ー一九

八〇年八月二十九日 (1980年9月8日付1298号)

22

22

「65歳線引き、失対終息」の  
改悪とたたかう——一九八〇年  
十二月八日労働省前（一九八〇年  
十二月十五日付1312号）



24 復刊1号から  
32年9ヵ月、「じ  
かたび」は1500  
号をむかえた  
(1984年9月24日付)

24



23 軍拡・臨調路線による失  
対予算の削減に反対して  
(1984年1月19日付1465号)



23



# 発言でつづる『じかたび』の教訓

## 一、たたかう伝統うけついで

「『世界長』ですか、『福助』ですか」と駅員にきかれたという国鉄駅止めの送りになったころの『じかたび』。「古いなあ、『スニーカー』にしたならなんて声も一時でたことがある、『じかたび』。しかし、『じかたび』は戦前からの革命的な伝統をしっかりひきついでいるのです。

### 戦前からの伝統

昭和二年の金融パニックから始まった大恐慌のもとで、労働者のたたかいが広がり、昭和三年、「日本労働組合評議会」にかわる「戦闘的労働組合の全国的連合体」として「日本労働組合全国協議会（全協）」が結成され、産業別に十一の単産機関紙を発行します。その

一つが『土建労働』でした。また、「合理化」で職場をおわれた労働者の失業反対闘争のなかからも、多くの小新聞が生まれ、職業紹介所単位の失業者新聞『地下タビ』、『赤い手帳』、『あぶれた朝』などが、失業反対闘争の有力な武器となりました。（吉村英『日本の機関紙』から）

この点については、「全協の自由労働者の機関紙としてでていたときいています。当時も『じかたび』という名まえで」（近藤一雄元委員長『六百号座談会』）など、部分的には諸説がありますが、戦前の失業者、土建労働者のたたかう伝統をうけついでたことは明らかです。

### 当然だった有料購読制

戦後は昭和二十二年、東京土木建築労組（東京土建）の機関紙として、『地下タビ』が発刊されました。『発刊のことは』には「われわれの機関紙『地下タビ』を送る。ほんものの地下タビが我々が働くのにどうしても必要なように、この地下タビも我々の組合を發展させるのに役立つものにしてゆこう。みんなの本當の叫びをどしどし送ってほしい。みんなの力でこの地下タビを育ててゆこう」とあります。

同年六月に全日本土建一般労働組合（全日土建）が結成され、十月の第一回大会で「機関紙を参加組合の必要部数に応じて発行し、実費を徴収する」と決定。機関紙『土建労働』、『じかたび』、『ちかたび』などとかわる）を有料購読制で発刊します。

有料制は戦前から戦後当初までの機関紙で



「読む前夜、フトンの中で予習」(『きりひらいてきた』かたが、中心の組合活動』から)

は当りまえのことでしたが(弾圧の中で企業組合化するとともに無料制が広まった)、当時の編集者・山口晃氏はさらに、つぎのような事情を語っています。

「私は朝鮮戦争で発行禁止をくう(昭和25年6月)まで編集を手つだつていましたが、東京ではそれをアブレた人が百部ぐらいずつもって、五円で売って、そのうちから二円、その活動家に手数料をわたしました。それがアブレた人の一日のでづら(賃金)になったのです。地方へは全日土建から送っていたようです。無料だと、よみませんよ。組合機関紙がなんのためにあるのかがわかってくれば、

組合員は機関紙をだいにします。当時の一部五円は、でづらからみても、少なくない金です。弁当箱をつつむ紙にも不自由していたころですが、みんな、**「じかたが」**をたたくもってかえっていました。発行禁止になったのも、こんなふうには組合のすみずみまで**「じかたが」**がはいっていたことを、敵がおそれていた証拠ですね」(『六百号座談会』)。

そして、全日土建に入っていない組合へも有料制の**「じかたが」**は入りこんでいきました。「福岡あたりになると、全日土建の時代に加えている分会は少ないですよ。ただ、**「じかたが」**はずつとはいっていたわけです。資料でいどだつたり、部数にはいろいろありますけれども、その指導の影響は大きいんですよ。全日土建のたたかった成果がのっているんで、それを見てわれわれは激励されますし、方針などもそれにおいていこうとやっていたわけですね」(湯浅克孝元副委員長『一千号座談会』季刊学習49年12月号)。

### 全国単一の結集めざし

**「じかたが」**は昭和二十六年十二月に復刊し、ここから現在の号数がぎざまされていきます。

全日土建は二十七年六月に職人部が分かれて土建総連(のちの全建総連)を結成、九月の全日土建第七回大会は自労のみの組織として出発し、翌年、全日本自由労働組合(全日自労)と改称します。

当時は組合財政もほとんどないなかで、全国的な組織確立をめざして、労働省から手当をとるための全国統一闘争などに血のにじむ努力をかたむけたときでした。

二十八年から一年間、書記長をつとめた吉田治平氏は、その思いをつぎのように話しています。

「定期刊を死守しようというところで、月に一回か二回だつたけど、十二時すぎまで印刷してました。ガリ版のころは二千部ほどだけど、原紙がすぐ切れちゃって、夜があけても印刷がおわらない、というようなことがあったですね。それから帯封をつけ、はかりではかって、切手をはって、朝おきると芝の郵便局へリュックサックかついで、両手にふるしきいっぱいもっていったもんですよ。本部にいて、ベルトが機関紙だけだったから、とにかくこれをだすことで、全国単一を結集していったわけでしょう。だから、石にかじりついてもこれだけはださなきゃいけない。なんか悲壮な使命感みたいなものがあつたんですね」(『一千号座談会』)。

こうした努力はじよじよに実を結び、二十八年の二十九号からは旬刊の活版印刷が定着、部数も二十九年ころから五千部代にふえ、財政的にも、滞納で印刷所にさんざんめいわくをかけた時期もありましたが、三十年からは一部五円のうち一円を還元できるところまで確立してきました。

## つらぬいた独立採算制

とくに、財政面での特徴は、個人有料購読制とともに、独立採算制をつらぬいたことにあります。

「上納費（組合費）より」じかたび「代の方が多かったと思うんです。私は上納費の方で人件費をだしてもらわなければいけないんだけど、もらえなかったですからね。」じかたび「代は手をつけることができないお金だということ。だから、芝の郵便局へ行って帰りにパンの耳を買ってボソボソたべてたですよ」（吉田氏）「ぼくがきたころ（三十二年）には逆に一般財政に月一万円入れていたんですよ。このときは独立採算というのは、教宣部の方がつよい要望だったんです。それを編集費、新聞をよくするための方に使いたい、という要求だったんです」（湯浅氏）「千号座談会」。しかし、当時の「じかたび」はまだまだ、幹部の活動の参考資料としての役割にとどま

# 二、機関紙中心の組合活動の確立

## 統一闘争を進めるために

「機関紙中心の組合活動」ということばがはっきり使われたのは、三十六年の第二回全国教宣部長会議からです。当時のことを中

っており、分会財政の確立とともに、幹部用に分会財政で「じかたび」を買いとる、という傾向もでてきました。

## 先駆者「婦人しんぶん」

一方、婦人労働者のたたかい、母親運動の広がりのなかで確立してきた婦人部が三十二年十月から「自労婦人しんぶん」（婦人ニュース）として出発）を発刊したことは、「じかたび」にも大きな影響をあたえることになりました。「自労婦人しんぶん」は、労働組合婦人部の機関紙としては初めてのものであったばかりでなく有料制（月二回一部一円）と、字を大きくして読みやすくすること、文章をやさしくすること、という編集方針をかかげたのでした。

また、三十二年に第一回機関紙コンクールをひらいて、県支部・分会の機関紙活動の強化をはかっていったことは、「じかたび」の充実にもつながるものでした。

西委員長はつぎのようにふりかえています。「私が二度目の中央執行委員長に選ばれて、産別会館にあった本部に出動したのは昭和三十三年でした。このころの全日自労の実態は、まだ全国統一組織にはほど遠く、バラバラの

状態でした。「バラバラな組織をどう結集するか」、これが私にあたえられていた課題でした。この宿題を解くうえで、「大衆運動の法則性」を使い、「統一要求にもとづく政府への全国統一闘争」という方針、とくに賃金闘争に力点をおきました。が、全国統一闘争を進めるためには、どうしても中央機関紙を拡大、普及することが不可欠でした。全国に一万以上もある失対の現場に、中央本部の考えや方針を理解してもらうには、「じかたび」しか方法がないのです。私たちは機関紙の役割を強調し、「じかたび」の部数の拡大と職場での読みあい活動をすすめました」（『全日自労とともに30年』）「じかたび」55年5月26日付）

## 打ちだした「機関紙中心」

ここで言われている「全国統一組織」は、戦争と失業に反対する国民大行進（三十四年）の成功で大きくすすみ、「じかたび」も安保、三池のたたかいのなかで、三十四年の七千部を三十六年には一万五千部へと拡大、「じかたび」の重要性が確認されてくるなかで「機関紙中心の組合活動のスタイルを確立しなければならぬ」と提起した第二回全国教宣部長会議をむかえるのです。

ここでは、①教宣活動と組織活動はかたくむすびついており、教宣部を確立することが急務だ、②教宣手段を総合的に活用することが重要だ、などの点を前提にしたうえで、中央機関紙「じかたび」について、つぎのこと

を提起したのです。

「▽客観的な条件が中央機関紙を中心とした  
教宣活動をもとめている。それは第一に、長  
い組合運動の中で団結の思想がすすみ、運動  
を発展させるためには全国的な経験から学ぶ  
ことが必要となっている、第二に、個々バラ  
バラのたたかいかべにつき当り、全国的な  
統一要求を基本に統一してたたかうほかに道  
がなくなってきた、第三に、敵の攻撃の本質  
を正しく知り、はね返すため、方針を見出す  
ことが必要となってきた。このように運動自  
体が『じかたび』を要求している。まだ不十  
分な点を、つぎの方向で改善する。

①通信員制度の確立——とかく上からの片側  
通行となりがちな欠点を改めるために通信員  
制度を確立し、全国のなかまがつくる『じか  
たび』にする。②現場全体で読む運動——字の  
よめる人だけが読者になるというのでなく、  
現場で声をあげて読みあい、話しあい、意見  
をだしあうことによつて、中央機関紙は全員  
のものとなります。これは同時に、現場の要  
求やなかまの考えていることを分会に反映し、  
組合民主主義を確立し、組合員の自主性をひ  
きだす力となります。③配布——機関紙を配布  
する活動は、読者と機関紙を結ぶ最前線の職  
場活動といえます。『じかたび』を一日も早く、  
しかもどのような方法で配布すれば読まれる  
かなど、創意と工夫がされ、現場の活動家配  
布協力者などをつくりだすという組織活動  
が重要です。④有料制——無料の意見は『購読

制では一部に限られる』『組合員は機関紙を読  
む権利がある』などですが、全日自労は『買  
って自分のものとして読ませる』ための活動  
によつて、ルンペン性をこくふくし、階級的  
自覚をよびさまし、多くの活動家をつくり、  
組合の組織をつよめてきた。無料配布をして  
いる分会は『いちいち集めるのがめんどうさ  
い』『とりにくい』とまで、機関紙中心の組合  
活動にたいする考え方にあいまいさがある。  
個人購読制を原則として貫く姿勢が必要です」。

### 大衆路線貫く大事業

そして、この「機関紙中心の活動」の典型  
が、福岡県支部によつてつくられるのです。  
それは、「福永労相構想」としてだされた失対  
打切り法案反対の大闘争の中でした。

この経験は、日本機関紙協会の全国総会で  
特別報告され、大きな感銘をよびました。『機  
関紙と宣伝』38年3、4月号、『学習』38年4  
月号などに紹介。

報告者の五十嵐義雄福岡県支部教宣部長（  
当時）は、「失対打切りのきびしい攻撃をはね  
返すには、全組合員のたたかうエネルギーを  
あますことなく汲みつくすこと、そのために  
は、どうしても組合員一人ひとりの階級的な  
自覚を飛躍的に高めていかなければならない。  
では、一体それを何によつて実現するのか、  
それは機関紙において他にはない」と前おき  
して、第一回県支部教宣部長会議での粕屋分会  
からの報告を紹介します。

「粕屋分会では、『じかたび』がとどくたびに  
執行部が必ず目を通します。そして、この号  
には何が書かれているのか、組合員には何を  
重点に訴えていくべきかを考えます。それが  
終つてから、現場ごとにもうけられている教  
宣担当者を集めます。そして、現場討議の  
中では、この点とこの点だけはぜひ組合員に  
じっくりと理解をさせてもらいたいという指  
示をあたえます。だから現場では、この教宣  
担当者をかこんで、『じかたび』を中心に必ず  
大衆討議がやられています。千八百名の組合  
員の中に、有料で組合員の半数に近い『じか  
たび』が入りつつある。しかもこれを中心に、  
毎週たんねんな職場討議が組織されている。  
機関紙の記事は常に具体的で、しかもその中  
には一貫した中央の方針がならぬかれています。  
だから、このような職場討議が半年一年と系  
統的に続けられていくならば、一人ひとりの  
組合員は、みちがえるような成長をとげてい  
くにちがいない」

五十嵐氏は、この粕屋の経験をきいて、  
「私たちの前には、いまや大きな可能性がひら  
けてきました。朝の情宣や職場情宣だけでは  
とらえきれない層の中にも機関紙は砂地に水  
がしみこむようにとけこんでいくのです。も  
ちろん、そのためには、配りっぱなしではダ  
メで、読ませるための意識的な活動——それ  
を保障していくための活動家集団の組織が不  
可欠の条件である、ということもわかってき  
ました。ここにいたつて、はじめて『機関紙



中心の組合活動」というものがいかなるものであるか、その神髄にふれたような気がしました。「機関紙中心の組合活動」とは、とりもなおさず組合運動のスタイルを徹底した大衆路線でつらぬいていくための大変革であり、どんなに大きな事業であるかということがよくやくわかつたのです」と語ります。

### 要求を基礎に現場に組合を

支部、分会の組織体制がかなり確立していた福岡のこの経験とともに、「現場に組合がない」と表現される多くの支部、分会での運動の典型も、北海道の「函館オルグ」でつくりだされました。ここでは、未組織の失対労働者を組織するために、全道から八人の組織者集団が一カ月間、現場でいっしょに働きなごら不満、要求をひきだし、これをたたかいてるなかで、二百人の組合員を七百人に、「じかたび」を十数部から百八十部にふやし、職場委員会を確立していったのです。

三十八年の第十九回大会はこうした活動を総括し、①要求をききそに、②現場に組合をつくり、③機関紙中心の組合活動をすすめ、④学習活動をつよめる、という四点の基本路線にまとめて内部体制の強化をはかっていきました。

### 紙面刷新の二ころみ

こうした運動は、「じかたび」紙面を徹底した大衆路線にもとづくものに変革するたたか

いと一体のものでした。

五十嵐氏は先の報告の中で、「どうしたら読まれる機関紙ができるか」という問題に話をすすめ、「これは職場の中に自主的な討議をよびおこしていくものであり、編集担当者の頭を、徹底した大衆路線に切りかえることがカギである」と強調します。そして、福岡県支部はこうした考えにそった実践をふまえて、「じかたび紙面刷新のための意見書」を提出します。(『学習』58年4月号)

本部の側も、「失業と貧乏と戦争に反対」という明確な立場に立ち職場の「事実」をとあげながら、資本、自民党政府の攻撃をバクロし、労働者階級と、なかまの家族ぐるみの連帯をつくりあげる記事(子どもの手紙、伊勢湾台風など、被害者への救援活動なども)を重視しながら、新しい試みをいろいろとはじめていきます。

「とにかく大衆的な方向がでていゝるんですから、じかたび」の文章をどうやさしくするかということ、これをすいぶんやりました。小学校四年生、五年生の教科書をかりてきてね、それをさんざんよんで、漢字をつかわない表現や文章にしようということにしました。文章をやさしく、英語は使わない、むずかしい漢字はやめてカナをつかうということで、みんなが勉強して心がけましたね。ルビをつけたのも、現場からの要望がずい分ありまして、それで、実際に現場でよみあいをやっていますと、ルビの面になると『私よむわ』という

読み手がたくさんでるんですね。そういう点でもルビをつけるのはいいなと思ったんですね(武内スミエ元教宣部長「一千号座談会」)「はじめは委員長も企画会議に参加していませんね。そして、できあがった原稿はすべて印刷所にいれる前に、声をだして教宣部でよみあい、文章をなおし、見出しを検討していました(高田書記次長・当時書記)

「記事の見出しをつけるのに書記さんと意見対立、机をたたいて夜おそくまで大激論。自分の意見が通らず『ヤケ酒』をのんでしょげていた三上教宣部長……。たしかに「じかたび」は、その一号一号に全国のなかまのたたかいが生きいきとえがきだされ、教宣部の書記さんの書く字の一字一字は、正義と真実が生きた記事とされて編集されています。ときたま『義務的』に書かれる記事は死文となつていゝることは、私もいくたびか批判したこととします(和田富美夫元委員長「じかたび一千号」1949年10月28日付)。

### 大衆化と通信員活動

そして、「大衆化といっても、単に内容をくだけた記事でうすめるということではないのです。機関紙のもつ指導性、宣伝効果などの役割を果たしたうえで、しかも現場から本部までの間に充分息が通いあつていゝるという、最良の状態をつくりだすことが、大衆化の内容であると思います。このためには、組合員各自の手によってつくられる機関紙が必要で

す。これを成功させるのは実に地方通信員制度の確立にあるわけです(中西委員長、『じかたび』36年7月15日付)という観点での努力がかさねられ、『通信員ニュース』発行(三十七年から)、通信員会議(四十年から)が定着していきます。

### ついに七万部達成

拡大運動も倍化、倍化と計画がたてられ、昭和四十四年、ついに七万部を達成しました。失対法改悪前の三十八年とくらべると、失対労働者は三十一万人から二十一万人、組合員は二十万人から十三万人へと減ったにもかかわらず、『じかたび』は三万四千部から七万部へと大きく拡大したのでした。

当時の矢田恒夫教宣部長は「みんなが守りぞでてきた中央機関紙『じかたび』は、ついに五月二十六日あさ十一時、七万部目標を達成しました」と、その喜びを書いています。矢田氏はさらに「現場にたたかう体制をつくる職場委員会の確立とむすんで、『じかたび』の読みあい話しあいやすめられるなかで、拡大も定着するようになってきた」ことをのべて、「一千万におよぶ失業、半失業者を、組織の中心目標にかかけ、全日自労の体質を根本からかえようとしているとき、『じかたび』は失対内だけでなく、広く失対外の未組織労働者のなかへ宣伝し、組織するうえで、有効な一つの武器として役立てることができると今後の方向を提起しました。(『学習』44年8

月号)

そして、このような「機関紙中心の組合活動」にたいして、第一回日本機関紙協会賞(39年)、日本ジャーナリスト会議賞(44年)が与えられ、パンフ『きりひらいてきた』『じかたび』中心の組合活動(全日自労)、『機関紙中心の組合活動』(日本機関紙協会)、八田帰一

## 三、新しい峰をめざして

### 組合員の外へ拡大

しかし、失対事業にたいしては打切り攻撃がつづき、期限つき引退一時金攻撃によって、わずかの期間に数万人がやめていく、そして四十六年に新規就労が完全に止められるというなかで、一時、『じかたび』は五万五千部にまで減少しました。

そこから新たな拡大運動が始まるのですが、その特徴は組合外への拡大です。全国に先がけてその経験をつくりだした神奈川県藤沢分会の磯部武委員長は、「とうとう失対も四十人前後をさまようようになり、不安がつのできました。九死に血路をひらくには、いま何をなすべきか、老齢化したなかまにできることは何か、このことを真剣に考えました」と、その動機を語り、八百部にふやした力が失対事業を守るとともに、革新市長を生む原動力

『機関紙入門』(同)村上博光『機関紙中心の教育活動』(東大教育学部紀要第11巻)、明神勲『労働組合の教育活動の分析』(日本社会教育学会紀要44年度No.5)などによって、組合内外に広くその経験が普及され、教訓化されていきました。

の一つとなり、高齢者就労事業実施、それによる組合員の拡大へとつながっていったことを明らかにしています(『季刊学習』49年12月号)

本部は、藤沢から始まった、新しい拡大の経験を広げながら、十八の先進支部、分会を調査した結果をパンフ『みんなで作ってきた』『じかたび』拡大の経験(52年)にまとめました。このパンフの『はじめに』で、当時の浦沢栄教宣部長はつぎのように教訓を整理しています。

「第一に、『じかたび』拡大は、『だれでもできる大衆的な運動』であり、なかまは生活を守ることと、『じかたび』拡大のむすびつきや意義を理解し、大きなちからを発揮している。

第二に、拡大をつうじ、なかまは『組合の活動に参加』し、また『成果をあげ』たことで、『確信と団結』を強め、『組合の民主的・大

衆的な運営」が強められている。

第三に、「地域住民、民主団体、労働者などとの結びつきをつうじ、自分たちの生活を守るためにも、労働者、国民に支持される運動、共通の要求で共闘」を強めなければならないこと、「組織を大きく」しなければならないということの自覚をたかめている。

第四に、地域住民、民主団体、労働者などに、「じかたび」を購読してもらうことをつうじて、「全日自労の運動（また失対事業）への理解と支持を広げ、未組織の人びとを結集する大衆的土台」をつくっている。

第五に、執行委員会は、「なかまの要求実現と、組織の強化・拡大と、じかたび」拡大を統一」してとらえ、系統的にとりくんでいる。

### 失対再確立闘争のなかで

こうした土台の上になつて、さらに大きな飛躍をかちとる時期がやってきました。五十二年、三たび復帰した中西委員長を先頭に、「失対事業再確立」を要求する「三年闘争」に突入するのです。

そして、町に役立つ失対事業への転換と、就労者の自己変革をめざす、「民主的改革」の運動を基礎に、①四百以上の自治体との合意②五万人以上の失業者の組織化③すべての県評、地区労との共闘協約書④政党、労組、民主団体、議員などからの賛同署名、という目標をかかげ、職場委員会の確立、「じかたび」の読みあい話しあいなど闘争体制強化の課題

を提起します。

そして、「じかたび」拡大は「だれでもできる大衆的な合意・賛同運動」として、また失業者の組織化と結合して大きく前進を開始します。とりわけ、婦人のなかまの情熱的な行動がつつぎに壁を突破していきました。

「じかたび」紙面も、この闘争をすすめるために、①失対事業と全日自労のなかで強く生きぬいてきたなかまの手記（懸賞募集、「じかたび」の詩『労働旬報社』に収録）②失業情勢をめぐるルポルタージュ③中西委員長の対談シリーズ（政党党首、労組委員長、学者ら）などを企画しました。そして自治体首長、読者拡大の運動をつよめるとともに、特集号を月に一回か二月に一回くらい十万、二十万と刷って地域の労組、民主団体、自治体などへくばりました。

さらに、労働戦線の統一問題が重大になるなかで、国民春闘再構築の提案、労働戦線統一問題での主張なども大胆に特集し、要求獲得に執念をもち、それゆえにこそ「みんなで話しあい、みんなで決めて、みんなで行動する」ことが大切だと、「大衆運動の法則性」を明らかにしながらの訴えをつづけていきました（『日本の労働組合運動をどう建てなおすか』《合同出版》に収録）。

### 委員長から教宣部へ手紙

こうした紙面の改革を前進させた一つのキッカケは、「じかたび編輯についての私の意見」

という中西委員長の、教宣部あての手紙でした。

「①第一面を研究すること。従来、第一面は固い記事がのせられていたが、発想の転換が必要。うんとくだけた、なじみやすい記事が第一面とすること。第一二三号でいえば、『読者のこえ』の木村さんの投書『失対で育った長女が高校へ』など（略）が、第一面として最適。中央委員会の記事は二・三面でよろしい。木村さんの投書のすばらしさが、諸君に理解できるだろうか。しばらく一面は、この原則を守ってほしい。②見出しを研究すること。たんに見出しのことだけではないが、『心のある記事』をつくることを研究してほしい。諸君はまだ職場の人たちのことをほんとうには知っていないから、ムリな注文かもしれないが、人の心を打つ記事をつくることに留意してほしい。そうすれば自然、見出しも絞切り型ではなくなるはずである。組合機関紙は、単なる客観的報道紙ではない。なによりもアジテーターでなければならぬ（客観的事実を通じて）。諸君が書く一つひとつの記事のなかで、何を訴えようとするのか、たえず念頭において記事をつくってほしい。③紙面構成を研究すること。新聞を芸術的に検討してほしい。その点で新聞、『赤旗日曜版』などから参考になる記事を百例ぐらい切りぬき、ファイルしてよく研究してほしい。また、雑誌『ノンノン』などからも美術的な組み立

て方を研究してほしい。④『日刊ゲンダイ』などの手法からも学ぶ必要がある。⑤くりかえし言うが、組合機関紙は客観的報道紙ではない。アジテーターなのである。従って見出しのつけ方も大いに訴え調、説得調があつていいのである。」

これについて教宣部で話しあつたもようを当時の小早川清志宣伝・機関紙部長はこう書いています。

「①いい投書だと思つたが、そのままみすごして、分類どおりに編集した、②一面に投書をもつてくるといふ発想は浮かばなかつた、③アジテーターで……がわからない、などの意見がでてきました。いま編集部には四人の書記がいますが、全日自労に入つて四年が一人、一年半が二人、二カ月が一人で全員独身



町中に「じかたび」を

です。しかし、失業と貧乏のなかで全日自労ととも生きてきたなかまの姿に、感動しないはずがないのです。『機関紙連合通信』54年8月20日)

その後も、中西委員長は「この見出しはなんや」もつと本部を批判するような意見もせるようにせな」などと注文、若い書記(現在三人)も、これにこたえてがんばりました。こうした努力のなかで、五十五年八月の四十二回大会時に九万一九一五部という最高の峰に到達したのです。失対の組合員はほぼ全員購読、組合外に三万人の読者をえたのでした。

### 正念場はこれから

もちろん、解決すべき課題はたくさんあるとされています。いや、「じかたび」の正念場は

これからともいえます。

核戦争の危機をはじめとして、人類にとっては、かつてない危機が進行しています。日本でも、きなくさい政治がますます大手をふつてきました。健康保険改悪をはじめとした福祉の総破壊が、国民の苦しみを耐えがたいものにしていきます。職場での「合理化」、人間性破壊も目にあまるものがあります。とりわけ、高齢化社会をむかえるなかで、高齢者の不安はことばにつくせないものです。こうしたなかで「じかたび」がどのような役割を果たしていくのか……

また、失対の組合員が減少し、「じかたび」も減りつづけている現状をどう打開していくのか、「なかまを守りつつ、新しい道を切りひらく」ために、どのような指導性を発揮しなければならぬのか。さらに、建設・民間組織のなかで、機関紙中心の組合活動をどうつくりあげるのか……

高齢化したなかまにみあつた、「目で見ると記事」の工夫、よりわかりやすい編集などをどうすすめるのか……

困難ななかでも、夢を大きくもつて、「じかたび」よ、さらに輝け！いや、輝かしてみせる、という気概にもえ、いま二千号をめざして歩み始めています。



# 機関紙中心の組合活動

機関紙中心の組合活動は

活動家の組合から、

職場全員の組合にするため

機関紙をつくり、配り、集金し、

読んで討議し、

組合員の意識を高め、意見を統一し、

ただかいに立上り、運動を広げる。

機関紙中心の組合活動の中心である

“じかたび”は通信によってつくられ

配布、集金によってささえられ

拡大によって組織と運動を広げる。

## 読みあい話しあい

読みあい話しあいは、「機関紙中心の組合活動」の中でもっとも大切な活動です。

毎週、読みあいによって中央本部の方針を組合員が直接知り、社会の動き、全国のなまのさまざまな活動を知り、話しあいによって理解し、心を一つにしたときたかかう力になります。

読みあいは教宣の大事な方法です。支部執行委員会、職場委員会が“じかたび”記事のなを中心で討議するかをきめ、各職場ごとに読みあい、理解をふかめます。話しあいは執行部の意見をおしつけしないで、みんなの意見を大事にします。自分の意見がとり入れ



られ、なかまの自発性が発揮されたとき、たまたかう力がわいてきます。

読みあい話しあいには、勉強の場でもありません。まわしよみの当番にあたり、前の晩に家で子どもに読めない字にカナをふってもらって練習してくる人もいます。

組合にはいつて字が読め、書けるようになったなかまはたくさんいます。

このように読みあい話しあい活動は「職場を基礎に」の活動の源泉になっています。

職場討論版のよみあい話しあいは、わかるがわるゆつくりすすみます。字のよめないなかまも、新聞をまえにおいて耳をかたむけます。ほかのことをしていたなかまも、みんなの真剣なよみあいに、ほかのことをやめてよみあいに加わります。よみあいがもりあがってきました。

ちようど三十分でおわり、そのあとみんなでお話しあいにはいりました。「よし、わかった……」

(広島支部の読みあい話しあい)

# 個人有料購読制

一人ひとりが、お金を出して組合機関紙を買って読む―一部売りの有料個人購読制―ことを原則として努力してきました。

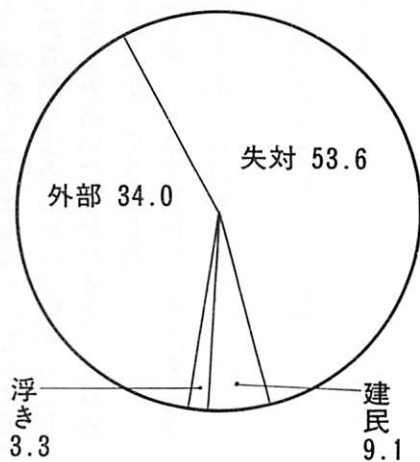
このことによって、買ったものは大切に読まれること。配布が敏速に行われること。読者が関心を持ち、役に立つ編集になること。などの利点があります。

最初は有料制にしても、多くのところが分会負担だったため、紙代負担に限度があつて部数が拡大されず、しかも機の片隅に積まれる状態がありました。これを個人購読にするよう運動化することによって、配達、集金が定期的に、規律正しくすすめられ、部数の拡大も飛躍的にすすんでいきました。

この有料個人購読の制度によって、組合員以外の未組織労働者の中に広がり、また組合の周囲にひとまわり大きな協力者、支持者の輪をつくりあげることができました。

# 独立採算制

図1  
“じかたび”読者比率



有料購読を原則とした目的の一つは、機関紙会計を独立採算とすることでした。独立採算制にすることによって、他の組合活動に左右されず、機関紙活動に専念できる書記を配置し、安定した編集体制によって、“じかたび”の定期発行を保障し、通信活動、配達・集金活動にも一定額の援助ができるようになりました。

# 配達・集金活動

「じかたび」をささえる活動のうち、配達・集金活動は、中央本部と読者をむすぶ血管の役割をもっています。

毎週一回きちんと読者に届け、確実に集金する無数のなかまたちの努力によって、「じか



たび」はまもられ、「機関紙中心の組合活動」が保障され、建設一般全日自労の活動にたいするたくさんの理解者、協力者を得ています。したがって、「じかたび」の配達・集金活動は立派な組合活動です。この配達・集金活動を生きがいとして受けもっているたくさんの組合員がいることは、組合のほりりです。

## 拡大運動

「じかたび」は個人購読制ですから、組合員の個人加盟と同じように、ふやさなければへるといふ運命を背負っています。

このため組合ではくり返し、拡大運動をよびかけ、読者の拡大をはかってきました。バラ売りからはじめた「じかたび」を固定方式に、分会一括から個人読者に、その読者の対象も運動の発展にあわせて、活動家から全組合員へ、未組織の労働者から地域住民、他労組へと広がってきました。



# 通信員制度

“じかたび”をつくるのは  
通信員、あなたです。

“じかたび”の特徴の一つ、「みんなで作る機関紙」は通信員制度によって保障されています。

「読者の対象を現場におろし、本ものの闘争力をつくる」という方針にもとづき、取材と通信に専念できる人が通信員として中央本部に登録して、現場のナマの記事、投書、生活記録、文芸などを、教宣部あてに直接通信する制度です。

中央本部に登録されますと、通信員証、腕章、バッチ、原稿用紙、封筒がわたされ、教宣活動誌、通信員会議などによって中央本部と連絡をとりながら、取材活動を行います。

紙面の中に通信員の記事が占める比率は五

建設一般全日自労中央機関紙

## じかたび

### 通信員証

氏名..... ( 歳 )

所属.....

有効期間  
-1984 (昭和59) 12月31日

この機関紙、職場しんぶんなどは、発行のつど、かならず中央本部に送ってください。  
■料金受取人私の封筒は必要ないで送ります。注文してください。

1983年1月1日

全日自労建設一般労働組合  
中央執行委員長 中野 隆  
東京都豊島区雑司が谷  
電話 03(987)0711 (代)



○パーセントをこえており、「じかたび」をささえる通信員の役割が非常に大きいことがわかります。

「通信員の手びき」から

### ▽記事をかく六つの要素

いつ、どこで、だれが、なにを、なぜ、どのように

### ▽よい通信を書くために

手をぬかず、具体的に  
文字はよみやすく  
だいじなところに力を入れる  
なかまに語らせよう  
メモをとろう

都道府県別通信数

(’83.8~84.7)

県名	通信数	県名	通信数
北海道	23	兵庫	23
青森	6	奈良	2
岩手	34	和歌山	1
宮城	5	鳥取	1
秋田	12	島根	4
山形	1	岡山	9
福島	21	広島	102
茨城	1	山口	4
群馬	4	徳島	5
埼玉	2	高知	34
千葉	9	福岡	596
東京	56	佐賀	25
神奈川	18	長崎	25
新潟	16	熊本	18
福井	5	大分	42
長野	20	宮崎	3
静岡	3	鹿児島	11
愛知	53	沖縄	2
三重	9	地域組織	3
京都	40		
大阪	4	合計	1,252

都道府県別通信員数

’84.7現在

県名	通信員数	県名	通信員数
北海道	10	兵庫	2
青森	1	奈良	1
岩手	3	鳥取	2
福島	4	島根	6
群馬	1	広島	7
埼玉	5	山口	2
東京	17	徳島	12
神奈川	6	香川	1
新潟	5	高知	4
富山	5	福岡	52
石川	1	佐賀	7
福井	8	長崎	18
長野	3	熊本	2
静岡	7	大分	6
三重	2	宮崎	2
京都	2	合計	204



# 組合員の心となる機関紙へ

読みやすく、身近で関心のある記事を、わかりやすくという編集方法は、まず活字を思いきって大きくすることからはじまりました。一・五倍活字の採用です。漢字に全部かなをふる「ルビ付」紙面、ひらがなだけの紙面を工夫したこともありました。

組合運動の経験のあさかった婦人のなかまのために独自の機関紙「自労婦人しんぶん」（一九六四—六七年）が発行

されました。

婦人しんぶんので大きな活字を使う工夫がなされ、「じかたび」紙面へ引きつがれていきました。

また建設労働者、民間労働者の中に組合員の拡大をという方針にもとづき、「建設・民間版」（一九七一一七三年）が発行され、未組織労働者に働きかける武器となりました。

## “じかたび”について

いままでは分会の幹部を頭において、編集がやられていたが、読者の対象を現場におろし、思いきった編集の転換をやる。

これは現場にホコ先をむけている当局の攻げきをはねかえし、ほんもの闘争力をつくるためである。

（第十九回中央委員会決定、昭和36・9）

# 闘いが『じかたび』をつくり 『じかたび』が運動を広げる

三〇年余にわたるたたかひの歴史が『じかたび』を育ててきました。雇用保障、社会保障をつねに闘争課題として保育所つくりの運動から、労働省をとりまく大動員、そして合意賛同運動まで創意あふれる闘争戦術の数々が『じかたび』の紙面をかざり、『じかたび』の記事にはげまされ、運動は全国にひろがっていきました。

## 保育所つくれ

乳呑み児をかかえて働きに出なければならなかったなかまたちには、保育所つくりの要求は、仕事と生活を守る要求であり、社会福祉運動のさきがけとなった。

## 大行進

一九五九年に行つた戦争と失業に反対する国民大行進は、『失業と貧乏と戦争に反対』を組合の象徴的合言葉にし、この力が安保闘争へひきつがれていった。また、この大行進によって全日自労の全国結集が急速にすすみ、大行進方式は「くらしと福祉」行進に生かされていく。

## 大動員

炭労と組んで、国会に向けての大規模な上京動員（一九六三年）から、労働省をとりまく一万人動員（一九六八年）まで、全国のエネルギーが結集されて、国会をゆるがした。

## 大量宣伝

一日に十萬枚のビラをまききる。世論に訴えて地域の全戸配布はくり返された。

## 生活危機突破

石油ショックの労働者、国民へのしわよせに反対した『生活危機突破』大集会は賃金改訂の口火になり、やがて各階層、団体の運動に広がっていった。

## 合意賛同

各労組、団体、住民の理解と支持を得てたため、全国的に署名・ハガキ運動を広げている。合意賛同運動は組合外に『じかたび』読者を急速に広げていった。

## 生公連運動

生活関連公共事業の拡大を要求する運動は建設関連労組と共闘で、建設産業の民主化をめざす運動として各地にひろがっている。

# 県本部・支部・職場新聞の発展は 『じかたび』の充実と一体





「じかたび」が一五〇〇号をむかえました。三〇年をこえる長い長い旅の一つのくぎりということでしょうか。いずれにしても、大きな事業であることにまちがいありません。

今、私には「じかたび」の思い出が次からつぎへと浮かんできます。

昭和二十七年、私が本部委員長として上京したとき「じかたび」はガリ版刷り二ページで発行されていました。



私にあたえられていた任務は全日自労、当時は全日土建と呼ばれていましたが、これを全国組織としてつくりあげることでした。自由労組は各地に組織されつつありましたが、全国的結集はほとんどできていません。全国が統一してたたかうようにすることが中心課題でありました。

第一回中央委員会で、私たちは初めて労働省への要求闘争の方針をきめま

した。そしてこのたたかいは一定の成果をあげ、「嵐のような」という形容があう全日自労への結集がはじまるのです。このとき私は「じかたび」の果たす重要な役割を知るのです。それが後になって「機関紙中心の組合活動」という方針に発展していきました。当時書いた記事を読み返すと、とてもなつかしい。

昭和三十三年、私が二度目の委員長

建設一般全日自労委員長 中西五洲

として上京したとき、全日自労も「じかたび」も大きく成長していました。たしか湯浅君（現在・顧問）が教宣部長で、「じかたび」が刷り上がると、くるくると紙にまいて包装し、それを大きな風呂敷に入れて何人かが肩にかついで愛宕（あたご）郵便局まで運んでいました。なぜかその光景が今も鮮かに浮かんできます。

昭和五十二年、三度めの委員長とし

て上京したとき、「じかたび」はさらに大きく成長していましたが、全日自労は労働省の失対打切り攻撃のなかで苦悶（くもん）していました。

二度の三年闘争をへて、たたかいは今、大きな「山ば」をむかえています。「なかまを守り」つつ、「新しい道」を切り開くことができるかどうか、まさに息詰まるような局面でもありません。中央執行委員会は決意をこめてこ

のたたかいの先頭にあります。全国のなかまのみなさんの総決起をねがわずにはいられません。

考えてみれば、「じかたび」は私たちの大きな戦力であります。眼には見えなくとも大きな力となっています。この重要な段階で、「じかたび」の拡大と「読みあい話しあう」活動をつよめていくことが大切となっています。心をこめて「じかたび」君ありがとう、これからもよろしくと言いたい気持ちでいっぱいです。

（一五〇〇号から）

## 「じかたび」君ありがとう

## 座談会

# 開くのが怖こわくなるような新聞を

司会 きよは、"じかたび"の紙面や私どもの「機関紙中心の組合活動」について、組合の"外"からみて、いろいろ感じておられる点をお話しあいたいだければと思うのですが。

福谷 全日自労が「機関紙中心の組合活動」という方針を確立したのは、安保闘争直後の一九六一年の教宣部長会議だ

つたと思います。ちょうど失対打切り反対のたたかきも始まっていた時期です。



福谷さん

それで「機関紙中心の組合運動」というパンフをつくるのですが、現在の運輸一般がこのパンフを活用してくれまして、それらしい「機関紙の有料購読制」「通信員制度の充実」という路線が確立されてきているのです。

司会 福谷さんには第一回通信員会議にもでていただいたようですね。

福谷 あれは昭和四十年ですか、大変思い出深い会議です。北海道・夕張の小野さん（現在夕張支部委員長）が組合事務所に仏だんをおいた話をしました。唯物論者の幹部も多いわけですが、大激論をして、死んでも行き場のないなかまの不安をどうするか、やっぱり仏だんが必要だということになったという話です。

「記事の書き方」とか、ふつうの通信員学校でやるようなことをあまりやらなかったのですが、この話から「なかまの心をとらえる」ことが議論の中心になり、

### 出席者

中央大学教授

江口 英一さん

日本機関紙協会事務局長

福谷 保夫さん

『全建総連』編集部

千葉景四郎さん

司会 "じかたび"編集部

そういうなかで本部の方針をどれだけ現場のなかまにわかってもらうのか、それにはやっぱり、"じかたび"がなかまに読まれているかどうかだったわけです。そして、当時まだ七、八千部だったものを倍化させることに成功し、現場での読みあい話しあい活動をすすめたわけですね。「大変な運動が始まっているんだなあ」と感動したおぼえがあります。

# 「じかたび」音頭

詞 荒木子風  
曲 染谷タツ

きたで みなみで ほんぶで しぶでよ  
きょうも たなかう この ニュース オナービ  
ぜんにち じろうの みらーを てらす じかたび ホラ  
ヨイショ みておくれ しょうだ じかたび みんなで  
一よんで よんで すすめて ソレ ドン ドン とさ

「じかたび音頭」(三重・松阪・荒木子風)は、カラッとしたあかるさ、力づよさの底に、なかまとの連帯や方向がうたいこまれており、「じかたび」を中心にたたかいたいとくむ労働者の決意が太鼓の音のようにひびいてきます。(1966年5月25日づけ第545号の詩人・門倉さとしさんの選評から)



高手  
右足を左足の前に  
踏みこんで



低手  
右足を左足の後ろに  
踏みこんで

一、北で南へ 本部で支部でヨ  
今日もたかう このニュース  
すすむ全日自労の道を  
てらす「じかたび」ホラヨイショみておくれ  
そつだ「じかたび」みんなて読んで  
読んですすめて ソレ  
ドンドンドンドンとサア

二、そつば向いてる なかまがあればヨ  
これで食えるか 聞いてみな  
いつかふり向き「じかたび」かこみ  
生きる討議の ホラヨイショ花が咲く  
そつだ「じかたび」みんなて読んで  
読んですすめて ソレ  
ドンドンドンドンとサア

三、文字もくつきり 全日自労ヨ  
そろそろ鉢巻 二十万  
シヤベル片手に「じかたび」片手  
たては勝利の ホラヨイショ朝がくる  
そつだ「じかたび」みんなて読んで  
読んですすめて ソレ  
ドンドンドンドンとサア

1966年「じかたび」500号記念文芸コンクールに入選した三重・松阪分会荒木子風さんの詞に宮崎分会の染谷タツさんが作曲したものです。宮崎分会婦人部で、おどりをふりつけて「第9回宮崎のうたごえ」に参加し、高く評価されました。

みてお くれ

1 手だけ 右にゆらす  
2 左にゆらす 右にゆらす

そ お だ じ か た び み ん な で よ ン で

1 2 3 4  
右足から前に 左前 右前 左前  
両手を前からだんだんに高く上げる

よ ン で す す め て ソ レ ド ン ド ン ド ン と さ

1 2 3 4 1ツ 2ツ 3ツ  
右足を左足の後ろでつまきトン  
右足から下がって両手を前を通って両わきに下げる  
両足をそろえる  
両足をそろえる  
両足をそろえる

(1967年1月2日づけ第581号)

## 読者の投稿

### まきこんでしまおう闘い

東京都杉並区 山口 京子

“じかたび”を読んでいて私の方がはずかしくなってしまうことがよくあります。だって、ずっと若い私の方が小さいことにくよくよして、ほんとうに大事なことを見うしないがちになっっているんですから。

じつは、きよ年の秋、子どもを生んで、十二月から産休明けで仕事にかよいはじめました。子どもをあずけるのに、満員の通勤電車で十五分のらねばなりません。ほとんどが三十代すぎの男の人たちで、子どもをだいた自分が、どこか場ちがいなところまぎれこんだようで、はずかしく、ましてや泣かれると、ひや汗をかいて小さくなっていました。全日自労のみなさんだつたら、仕事や子どもに夢中で、そんなこと思うすきまもないでしょう。はずかしいなんて思う私の気持ちはずかしいよとしかられそうですね。

そうなんですよね。よく考えれば、私はちっともおかしくなっていますよ。働きたいし、子どもがほしかったから、保育所にあずけて仕事をしているだけなのだから、身近に産休明けで赤ちゃんをあずかる保育所がないことが問題なのだし、保育所どころか、さまざまな福祉を後退させている政府こそがはずかしいのだと。“じかたび”のみなさんの声を読んでいて、そう思

えるようになりました。それからは気持ちが悪くなって、子どもに話しかけてやるゆとりもできませんでした。

デモのとき機動隊がならんでいると緊張して、につつき敵としか思えないのが自分です。ところが、「まだ世間なみの、一般人の顔をしている若い警察官」に「あんたらの賃金を上げるためにデモしているようなもんだよ」なんていってのけられるのは、ただものではありません。まきこんでしまおうですね。

きまりきった考えにとらわれない、そういう運動をしていかないことには勝つことはできないですよ。自分の生活を守ることと、みんなの生活を守ることがひとつであることをからだでつかんでいるんだなって思います。

六十五歳線引きをやるうとして五十八年から働く日を減らすうとしているのです。老人は働かなくてもよい、生きていなくてもよいというやり方ではないですか。戦前、戦中、戦後を生きぬいてき、日本をこれだけの国にそだててくれた人たちにこんなことをするなんて、許せません。

年よりをじゃま者あつかいする思想、弱い者を弱いからしかたがないんだと切りすてるのは軍国主義の思想です。ここでうちやぶらなかつたら、ふたたび戦争がおこるのではないかと不安です。

みなさんが、このたたかいで政府に勝つことは、人間を大切なものとする思想を行政に実らせることなんです。そういうすばらしいたたかいを全日自労はもっている。

(1983年2月7日つけ第1419号)

# 愛読してもう10年に

福岡県田川市 野田 吉行

機関紙を愛読して十年になります。その間いろんな反対運動が展開されましたが、すべてが成功ではなく、あるときはおしきられながらも悔いをのこさぬたかいであったと思われれます。それは最善をつくしたからでしょう。

失対が生まれて三十五年、時代の流れとともにおし流されようとしています。なんともやるせないような息苦しさを感じます。そんなとき（占部）オスエさんの投稿をさがします。

一面識もないけれど、ほのぼのとした話題と、さりげないやさしさは読む人の心をなごませます。

(1984年4月30日づけ第1481号)

## 行く先ざきで自労の話

東京都大田区 島松 芳

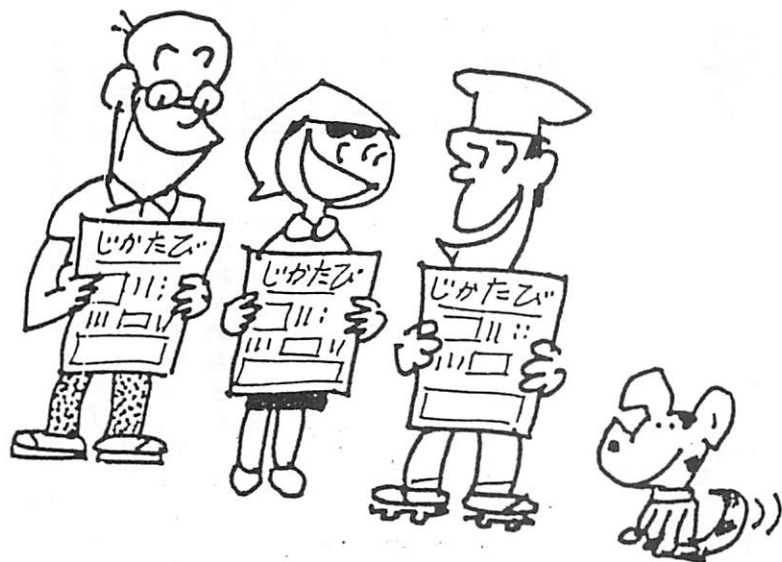
私は、ことし六十歳の個人タクシーの運転手です。都営住宅の一階にすむ佐藤壽（ひさ）子さんという全日自労の方にすめられて、「じかたび」を二年ぐらい読んでいます。

佐藤さんは、いつもニコニコ、そしてコツコツと訴え、選挙も、そんな調子でがんばっていました。

二年前、御主人を亡くされて、カナリアとだけの二人暮らしなのに、暗さはちつともありません。私は、いつもそんな姿にはげまされています。うば捨て山”の現代版、六十五歳線引きとのたたかい。焼身自殺の抗議申入れをする組合員に、委員

長が「やるなら、私がまっ先に……」の説得と決意。そしてくり上げられる全国津々浦々での訴えと座りこみ。人の心をもつ者なら、だれでも味方にひきこんでの統一の広がり。

私たち個タクと同じ一人親方、ダンプのなかまが元請けと賃上げ交渉する、労働委員会で解雇てっ回の勝訴：等々、海綿が水をすいこむような感めいをもって読みました。



じつは私たち、昨年十二月に個人タクシーの労働組合をつくり、自交総連に加盟したんです。行く先ざきで自労の話をしていきます。「自労の六十、七十歳がたたかっている。個タクの五十、六十歳もたたかえるはずだ」と。

(1983年5月9日づけ1432号)



# ガムバルなま

佐野瓢人

(1960年5月30日づけ第247号)



# おびさん

佐野瓢人

(1984年9月24日づけ第1500号)



マ  
ン  
ガ

◇佐野瓢人さん：左の「たびさん」第一回目からかぞえて丸二十五年あまり。「三重の産。風采（ふうさい）のあがらぬうえに、大のテレ屋である。十七や八の娘っ子じやあるまいし」—これは、一九六七年の新年号の作者紹介。東京都清瀬市在住。

◇中村かめおさん：同じく作者紹介らんに、「両足が悪い。失対のことは五年ほど前、全日自労の組合員になった姉から話をきいたり……」と。福岡県大牟田市在住。

(1972年5月15日づけ第874号)



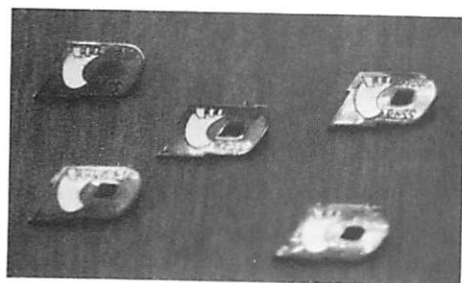
かくばい かくばい  
拡大には拡大で

中村 かめお

# "じかたび"のあゆみ

昭和	"じかたび"の動き	組合の動き	国内外の動き
22年 24年	東京土建"地下タビ"を発刊	全日土建を結成(6月) 失業対策事業はじまる(5月) 失対賃金193円50銭	2.1ゼネスト中止(1月) ドッチプランで大量失業 下山、三鷹、松川事件(7~ 8月)、朝鮮戦争(6月)、 レッドパージ
25年 26年 27年	米占領軍から発行停止(9月) ガリ版で復刊(12月)、現在の号数はここから	アブレ反対闘争ひろがる	サンフランシスコ平和条約 白鳥、メーデー事件おこる
28年	第29号から活版へ(11月)、タブ2頁旬刊、一部5円。約2,000部	全日土建から職人部がぬける(6月)、失対就労者にはじめて年末手当3日分	破防法成立(7月) 朝鮮戦争休戦協定成立(7月)
29年	第三種郵便物認可(2月) "じかたび"講読者バッチ1個30円(2月)	第8回大会で全日自労に改称(10月) 特失事業実施反対闘争(12月)	第5福竜丸事件(3月)
30年	4月一時休刊、7月復活 紙代1部につき1円還元(11月) 総評機関紙コンクールで佳作(11月)	緊急就労事業実施(1月)	第1回母親大会(8月)
31年	婦人部ニュース発刊、ガリB4版2頁1部1円(10月)	全日自労総評加盟(11月)	砂川闘争激化(9月)
32年	第1回機関紙コンクール実施(1月)	手当闘争全国でひろがる	朝日訴訟はじまる(8月)
33年	婦人部ニュースを"自労婦人しんぶん"に改題(2月) 総評機関紙コンクールで"自労婦人しんぶん"入賞 第13回定期大会で①1万部を目標②カンパでカメラ購入③教宣書記採用をきめる(9月)	80円賃上げ要求をきめ、全国的に賃金闘争へ(9月)	中央社保協を結成(9月) 警職法闘争(10~11月)
34年	"じかたび"独立採算制実施(10月) 「あかつき印刷」で印刷はじまる(5月) "自労婦人しんぶん"1部1,000円(7月) 第12回中央委で"じかたび"倍化運動へ(9月) 月1回4頁へ(9月)	「戦争と失業に反対する国民大行進」(1~3月)	安保共闘結成(3月) 安保反対デモ 三池闘争(11月)
35年 36年	週刊制実施1月2頁2回、4頁2回(4月) 「学習」誌発行、1部50円(2月) 第16回定期大会で①2万部目標②紙面の大衆化③支部1名以上の通信員登録きまる(5月) "じかたび写真ニュース"発行(7月) 毎号4頁だてへ(7月)	建築インター加盟(8月) 総評中心に国民大行進(1月)	新安保条約強行採決(5月) 松川事件勝利判決(8月)
37年	第17回定期大会で①機関紙中心の組合活動②読みあい話しあう活動へ(5月) "自労婦人しんぶん""じかたび"に合紙、「婦人らん」を1.5倍の活字でつくる(7月) 「通信員ニュース」第1号発行(9月)	福永労相、失対打切り構想をだす(5月)大闘争へ	米原潜寄港阻止闘争(3月) 政暴法廃案(5月)

昭和	“じかたび”の動き	組合の動き	国内外の動き
38年	紙代月ぎめ30円、5円還元(11月) 国鉄駅止制を実施(11月)	衆、参院で失対法・職安法改悪案強 行採決(6～7月)	日韓会談ふんさい(1月) 沖縄返還国民大行進(4 ～8月)
39年	第1回日本機関紙協会賞を受賞(1月) 第20回大会で7万部増紙計画決定(5月) 読者にカレンダー贈呈(12月)	失業者闘争はじまる(7月) 第1回全国老人集会(9月)	朝日茂さん逝く(2月) 米軍、ベトナムへの北爆 はじめる
40年	第1回全国通信員会議(3月) 500号記念文芸コンクール実施(7月)	賃上げなど8大要求で闘争へ	日韓条約批准強行(11月)
41年	宣伝紙を20部に1部(4月) 月2回4頁、2回8頁に(6月) 「通信員ニュース」を「教宣活動」に改題(8月)		10・21ベトナム反戦スト
42年	全員購読運動の促進	5つの権利要求で失業者闘争	ベトナム侵略反対闘争た かまる
43年	「教宣活動」誌月1回定期化へ(10月) 第47回中央委、職場委員会の確立と7万部 達成へ(11月)	失対再検討ふんさいで大行動(7～ 8月)	エンタープライズ寄港阻 止闘争(1月)
44年	“じかたび”拡大月間(2～3月) 7万部達成(5月) 8めんのルビつき実施(6月) 日本ジャーナリスト会議賞を受賞(8月)	日雇健保、失保改悪で連続的な国会 動員(4月) 失対予算2割削減反対闘争(12月)	沖縄返還を中心に佐藤、 ニクソン会談、 日米共同声明(11月)
45年	毎号8頁だてへ、紙代月40円へ(1月) 500万枚大量宣伝8回(8月から)	失対全廃ふんさい闘争 日雇健保擬制適用廃止(5月)	
46年	毎日新聞に松本清張氏と和田委員長対談の 意見広告(3月) 建設・民間版を発行(12月)	中高年雇用促進法成立(5月)	第1回9・15高齢者大集会
47年	藤沢分会など組織外へ“じかたび”の拡大		
48年	紙代月60円に(1月) “じかたび”拡大で標語を募集	失対賃金再改訂5%(10月)	ベトナム和平協定調印(1 月)
49年	紙代月80円に(1月) 季刊「学習」発刊(2月) 建民版を“じかたび”に合紙(3月) “じかたび”1,000号(10月)、同祝賀会(11月)		低所得者の要求前面に「国 民春闘」
50年	3ヵ年計画で拡大へ(8月) 紙代月100円(11月)	建設一般・山ノ内集会(7月)	春闘抑制 ベトナム解放(4月)
51年	第1回中央教宣学校、通信責任者会議(2 月)	甲・乙事業へ、「くら福」大集会(12 月)	ロッキード問題、田中角 栄退陣
52年	『全日自労の歴史』発行(8月) 中西委員長対談シリーズはじまる(12月)	第38回定期大会(石川・山中)で失対 事業の再確立の方針(8月) 全日自労30周年	
53年	2度目の日本機関紙協会賞受賞(2月)	失対再確立3年闘争(5月)	国連軍縮特別総会(5月)
54年	9万部達成(7月) 仲間の手記募集	中高年雇用・福祉事業団全国協議会 結成(9月)	
55年	「建設・民間」2頁に(1月) 『じかたびの詩』発行(8月) 紙代月130円に(10月)	建設一般全日自労を結成(8月) 55年制度検討の結論(12月)	衆参同時選挙で自民党圧 勝(6月)
56年		「特例」闘争、新3年闘争	臨調「行革」路線の本格化
57年			「全民労協」発足(12月)
58年	『新聞教室』発行(7月)	予算削減反対、就労保障闘争	老人医療有料化(2月)
59年	1,500号(9月) 紙代月150円に(10月)	70歳以上15日就労	健保・雇用保険改悪(7 月)



労働旬報社

手記

●失業と貧乏をのりこえて

じかたびの詩

●全日自労建設一般労働組合編

なまの聲よ、岩をも動かせ!

戦後、失業と貧乏のなかを、失却事業に突き、仲間と助けあいと、きびしいたたかいを通して生きてきた「全日自労の仲間」が、一字一句「絶望しの人で」つづった感動の手記。本書は単なる回想にとどまらず、二度と再び戦争と「不幸」をもちたしてはならないという人間的な叫びにあり、現代に生きる読者の胸を打たすにはおかない。

労働旬報社 0332-328619 1024 定価900円

機関紙活動が20倍楽しくなる

## 新聞教室

◇職場・地域の新聞づくり  
日本機関紙協会副理事長 金子徳好

◇機関紙中心の組合活動  
全日自労建設一般労働委員長 中西五洲

発行 全日自労建設一般労働組合

「じかたび」1500号さらに輝け 領価500円

---

1984年11月2日

発行 全日自労建設一般労働組合  
東京都豊島区雑司が谷3の22の10  
〒171 電話 03(987)0711  
郵便振替口座 東京2-25880

印刷 (企)中高年ひかり印刷

---